大学図書館からの学習支援の工夫
～連携を視座に～

報告者
矢崎　美香（九州女子大学･九州女子短期大学　附属図書館　業務課　副主幹）
飯野　勝則（佛教大学　附属図書館　専門員）
赤澤　久弥（京都大学　附属図書館　情報サービス課　課長補佐）

コメンテーター
山本　順一（桃山学院大学　経営学部･経営学研究科　教授）

コーディネーター
松戸　宏予（佛教大学　教育学部　准教授）

参加人数
45名

今、大学図書館では、変革する大学にあって求められる大学図書館像として学習支援や教育活動への直接的な関与が必要となっている。では、大学図書館は学生にどのような学習支援を行っているのだろうか。当分科会では、学習スキルの手だての工夫, ラーニング・コモンズの事例を、図書館職員・学生・教員との連携を軸に検討する。

学習スキルの手だての工夫では、九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館が、レファレンス事例記録や教員との連携を通して学習支援に繋げた事例を紹介する。また、佛教大学附属図書館が、お気軽検索の普及を図るうえで、学生のみならず教員に講習を開始した事例を紹介する。ラーニング・コモンズでは、京都大学附属図書館が、図書館職員・学生・教員の協働を軸に、ラーニング・コモンズのコンセプトや設計を行った事例を紹介する。これらの報告を受けて、ミニシンポジウムでは連携を進めるうえでの課題と具体的手だてを検討する。

〈第 13 分科会〉

大学図書館からの学習支援の工夫
～連携を視座に～

分科会のねらい

今、大学図書館では、変革する大学にあって求められる大学図書館像として学習支援や教育活動への直接的な関与が必要となっている。では、大学図書館は、学生にどのような学習支援を行っているのだろうか。当分科会では、学習スキルの手立ての工夫、ラーニング・コモンズの事例を、図書館職員・学生・教員との連携を軸に検討する。

報告の概要

当分科会では、3 人の報告者による「学習スキルの手立ての工夫」、「図書館職員・学生・教員との連携」、「ラーニング・コモンズ」の各トピックに関する、具体的実践事例の報告を行った。また、個別の質疑応答について、新しい取り組みを試みた。それは、参加者をグループ分けした上で、意見集約と議論を深める場とするため、発表を聞いた後の時間をグループディスカッションの場としたことである。そこで表出した疑問や意見は、別紙に書いて提出してもらい、全体ディスカッションで応答することとした。以下は、各報告（詳細は発表資料参照）および全体ディスカッションの概要である。

【第 1 報告】
「九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館の学習支援～教職協働新たな取り組みに向けて～」
九州女子大学・九州女子短期大学　附属図書館業務課　副主幹　矢崎美香氏

> 「学習スキルの手立ての工夫」において、九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館では、綿密な現状分析を行うことで、情報リテラシー教育を進めた事例を紹介。

＊図書館のモットー：「学生が学ぶことの愉しさを実感すること」
→貸出冊数などの統計は必要だが、図書館サービスの向上はもっと重要ととらえた。

＊学生への学習支援
・在学中に活用できるスキルを身に着ける＋卒業後、社会に出たときに活用できる情報ツールなどのスキルを習得
⇒情報リテラシー教育の再考
…受講型の講義から参加型へ
ワークグループ等で理解を深める
＋フォローアップの充実…ガイダンスメニューの見直し
学年別に合わせてステップアップした内容
課題や研究と連動した内容
…学生の理解度・状況もわかるので、それに合わせて実施
⇒例）成果物作成…評価は学生自身と教員が行う。同内容を２回作らせて評価の変化をみる
・論文作成に伴うスキル習得（…特に短期大学部）
単位にならない情報リテラシー授業を１５回行うが、出席率は良好
→発表をして理解度を探る＋文章作成・発表に伴うスキル習得を確認
＊レファレンスサービス
情報リテラシー教育前→図書の配架場所等が約半数
教育後→質問内容が変化⇒授業や研究に関するような継続した質問が増加
↓
学生ごとのカルテ作成

※学生の質問をなんでも受け付けると勉強に関する質問も増加し、教員との連携も増加した

＊情報リテラシー教育の成果

・学生の意欲向上

教員への質問内容が変化…成績の上昇ではなく、質問に至るまでの理解度が違う

・成功の背景

・大学規模が比較的小さい＝学生と図書館員、教員のそれぞれの距離が近い⇒顔がわかる

↓

図書館員のスキルアップが必要

・情報リテラシー教育を行う上で、必要なことは、教員と職員の足並みをそろえて、学生のニーズを知ることが大切。

【第２報告】

「佛教大学図書館における学修支援～教員向け図書館ガイダンスの設定と実施に至るまで」

佛教大学　附属図書館　専門員　飯野勝則氏

佛教大学附属図書館のシステム担当者が、「お気軽検索」とよばれるシステム運用および普及について、情報サービスの視点から、学生のみならず教員にも講習を開始した事例を報告した。

＊佛教大学附属図書館

資料数：紙媒体・約 99 万冊、電子ジャーナル・英）約 35,000 タイトル、日）約 1000 タイトル

＊学術情報の多様化と「図書館の課題」←利用者の目に触れない情報は存在しないに等しい

↓解決に向けて

システム面…ポータルサイトの構築＋横断検索を提供⇒検索能力に課題あり

人的面　…学生向けガイダンスの提供⇒参加者が少ない＋ガイダンス担当とポータルサイト担当が異なることから、サイトコンセプトが利用者に伝わらなかった

＊システム面での取り組み

初期フィードバックを受けて

⇒日本初のウェブスケールディスカバリ「Summon」の正式運用開始

「お気軽検索」でブランディング

図書館 OPAC ＋商用 DB まで統合的に検索可能になった

➡検索数、書庫の出納、DB 利用数、貸出冊数が増加した　（反対に入館者数は減少した）

これらの増加の背景…資料の直接的発見が充実した

間接的発見として関連 DB の活用に学生が気づいた点が推察される

第２次フィードバックを受けて

統合的検索（「お気軽検索」）の検索割合は、年々増加している

→「お気軽検索」に対する機能や理解が足りない

本格的に利用すると期待していた教員や院生に、十分に使われていなかった

⇒人的サービスが大切なことがわかった

➡学生に伝える＋教員に理解してもらう→教員から学生へのフィードバックを期待する

図書館ガイダンスを見直し＝ポータルサイト担当者が学生や教員などの利用者に伝える

※教員向けガイダンスを行う（初任者を中心に、既存の教員も対象：メールで告知）

ポータルサイトのテーマ

ポータルサイトと DB・電子ジャーナルなどを紹介＋実習形式で検索も行ってもらう

→受講した教員からの要望…院生にもガイダンスをしてほしいなど司書課程の授業に参加協力を行った

＊今後の課題…フィードバックを適切にして、実際に即した形にしていく必要がある

【第３報告】

「京都大学附属図書館　ラーニング・コモンズを巡る協働の経験から」

京都大学　附属図書館情報サービス課　赤澤久弥氏

京都大学図書館（以下京大図）…教職員と学生の協働と、その際問題となったものを紹介

＊京大図のラーニング・コモンズ→ 2014.4.25 オープン

既存のスペース利用＝耐震改修や増築でなく、必要箇所を改修

＊検討のスタート：館内ワーキングの活動
・ゾーニング検討のワーキンググループ設置（H24）
館内複数部署メンバー及び研究開発室教員で基本計画の策定と予算要求を行った。
※「大学図書館スペース協働デザインによる新たな「学び」への展開」と題した京都大学学術情報メディアセンターコンテンツ作成共同研究に応募し、コンセプトの検討を行った。
＊協働の展開とプロジェクトの進行
・授業との連携…京都大学デザイン学大学院連携プログラム FBL/PBL「学習環境のデザイン」と協働した→授業内での現況調査を行うとともに、受講生が空間デザインを担当した
・プロジェクトの進行
…現地調査→ヒアリングを基に提案し、意見を統合
※図書館執行部に説明してオーソライズし、施行・購入の承認を得るべく動いた
・基本コンセプトからの発展
…京大図側で基本コンセプトを設定
利用者間での交流と、相互作用による学びを促すことを目標に
↓
空間デザイン・什器選定等に対する提案の実現
・FBL/PBL のグループワーク→学生・教員でも議論。提案内容は、図面や模型で説明
・什器の選定→業者任せや、館員だけの選定でなく、学生の意見も取り込んだ
＊オープン後の展開
・活用プランの検討…館主催でイベントを行う・気軽に質問できる学生スタッフを常駐させるなど
・ラーニング・コモンズの在席者数…常時 50 人以上
＊協働から成果を導く
・学生の柔軟な発想を取り入れながら、館側と教員がそれぞれの視点から、助言とサポートを行う
・適正規模のチーム編成を行い、チームでの検討とオーソライズを行う
・目標を常に明確にすると同時に、一定の柔軟性をもつこと
⇒協働の経験から…コンフリクトマネジメント
図書館の変化のコアになりつつある…デザインスクールのフィールドとして採用
URA との連携…研究支援を目的とする対面サポートとワークショップの開始
さらなる改修の実現と学生・教員との協働が継続

発表者に対するＱ＆Ａ

1 情報リテラシー教育に対して、教員がどのようにコミットメントしているのか

情報リテラシー教育に対して、教員がどのようにコミットメントしているのか、教・職 連携、協働といいながら、実際には、一方的な協力になってしまう傾向はないのか。

素敵な連携・協働を実現するために必要なことはなにか。あわせて、図書館職員の方が、どこまで授業内容に関わるのか、教員からの反発などはないのか。

矢崎：程度はわからないが、授業の前に、先生と話し合いをよくする。一方的な協力ではない。
カリキュラムの方針等を外れない、シラバスの内容から外れない、先生の要望を踏まえる
上記に沿って、各授業に合わせた情報リテラシー教育の範囲を図書館で構築
⇒教員との線引きも、話し合いの中で確認しながらきちんと行う
授業内容に立ち入らない、踏み込まない
最初は反発もあったが、大学全体での初年次教育を行う流れもあり、時間をかけて理解されてきた

山本：どの大学でも、特に司書課程はコンピュータの知識とスキルを身に着ける科目が組み込まれている
⇒情報リテラシー教育での教・職連携
教職員の連携→専門分野検索を図書館にまかせるなど
司書課程であれば特に→教員と職員の一方的にならない
＝コミュニケーションのできる、図書館を使う教員と協力する
図書館員
⇒全職員が DB を使えるようにした
１学期全て情報リテラシー教育を現場に任せて行った。
大学の授業を行う非常勤講師となってやってもらった
＊アメリカの大学図書館の事例も踏まえて
→来館者数は減る＝図書館ポータルにア

クセス＋理系は電子ジャーナル使用
エンベデッド・ライブラリアン…各学部などに組み込まれ、教育サービスを提供
授業だけでなく、論文執筆も手伝う。つまり、精神的なところで、かなりの程度、ライブラリアンが授業の実施や評価まで一部食い込んでいるという実情になる。
＊日本の大学は、複写依頼すると学生負担だが、アメリカでは大学がすべて負担する。

2 システム担当と、サービス担当が連携するという方法はなかったのか

取り組みを円滑に進めるために、サービス的なことについては、システム担当と、サービス担当が連携するという方法はなかったのか。

飯野：サービスの担当者が退職して、システム側の人間がやむを得ずガイダンスを行った。持続的な運営のため、総務の人に入ってもらい、ノウハウを吸収してもらっている。

3 現在の担当者に何かあったら、この取り組みはどうなるのか

飯野：今年初めて教員へのガイダンス行ったが、自分が倒れると、他に任せる人がいないので、企画ごと倒れてしまう。
来年度も総務や他の人に伝え、連携して、バックアップ体制をつくりたい。

4 ソフト面での連携について

利用者など、学生の提案を取り入れた、このハード面での連携はよくわかったが、ソフト面での連携はどうだったのか。

赤澤：ラーニング・コモンズの活用検討会を開催し、ディスカッションでネタ出しを行った。協働した学生は建築系のため、元々ハードとして実現することを主眼としていた。ソフト面での学生との協働は、学習サポートデスクの学生と連携して、ラーニング・コモンズに配置している本のレビューや空間のメンテナンスをしてもらっている。

5 スタッフ間の情報共有について

赤澤：オーソライズについては、館内の管理職を含めた会議の中で、随時状況を報告した。ほかのスタッフについては、どういう空間ができるのかなどをまとめた資料を作って、できる前にみんなで共有した。こうしたプロジェクトでは、関係者全員を巻き込むことが必要である。

6 レファレンス・カルテの項目の内容について

レファレンス・カルテの項目の内容、どこまで記載されているのか。

矢崎：レファレンス・カルテは、まだ研究途中だが、受付の年月日、学籍番号、氏名、学部、学科、学年など＋所要時間（何時～何時まで）、これに加えて質問内容に関するゼミ担当・授業担当など。細かく記録する。
→カルテで記録をとるときは、必ず学生に確認をとるようにしている。
この内容を担当教員に話してもOKか、確認してカルテに記録をとる。
受けた質問内容によっては、教員に相談をするが、直接教員が学生に回答するのではなく、1度図書館に回答をもらい、それを学生に図書館から伝えるという方法をとっている

7 検索システムの更新の際に、予算措置はあったのか

検索システムを更新される際に、予算的な増はあったのか。予算減の場合、削ったサービスはあったのか。

飯野：予算は少しだけ上がった。これだけ充実できたのは、Summonの運営が日本初だったため、代わりに日本語化に関する手伝いをすることで減額してもらった。
図書館でも、内部で完結できるよう、Webデベロッパーを派遣で雇用した

8 学生が使う為の工夫や策があったのか

常に学生が利用されているとのことでしたが、学生が使う為の工夫や策があったのであれば教えていただきたい。また、想定外のエピソード（失敗・成功を問わず）があれば紹介して欲しい。

赤澤：ラーニング・コモンズでの「ボッチ学習」は少なく、想定どおりグループによる利用が主である。
また、京大の学生は元気で、発想が自由なので、あまりに奇抜な使われ方をされる懸念もしたが、そうした想定外の事は特にない。

→東大の山内先生に聞いたら、「ラーニング・コモンズは、はじめにどういう空間なのか示すことが大切」といわれた
＝若手研究者によるレクチャーイベントをすることで、学生に空間の性格を示すくらいで、特に工夫はしていない
なお、飲食については、ラーニング・コモンズオープンと同時期に、全館について、禁止のポリシーを蓋つき飲料は許すことに変更した。

9 カリキュラム・デザインの構築のあり方と図書館等の活用との関係性

カリキュラム・デザインの構築のあり方と図書館等の活用との関係性はどうなっているのか（カリキュラムの中で、学修目標に ex 情報リテラシーがないと支援は難しいように感じる）。

矢崎：情報リテラシーなどの言葉は入れてない。それに関わるスキルの情報検索とかはある
初年次教育で本を読んでレポートを書くという学修目標はあるので、そこに図書館情報リテラシー教育が含まれる内容に授業を構築している。先生の中に授業で検索を含むものを組み込む方もいる。

10 レファレンスサービスのスキルアップについての、研修について

レファレンスサービスのスキルアップについては、研修等を実施しているのか？

矢崎：職員が、正職１、契約職員１しかいないので、できない。
外に出て、情報収集する方法のレクチャーを受けるが、実際課内でそういう時間をとることはできない。
代わりに、館内の業務で、学生の対応に関して、声のトーンに気を付けたり、課題の内容など、口に出さない情報を、声をかけて引き出すように努めるなどしている。
パートさんも含め、全員がカウンターに出てレファレンスの対応を良くするようにしている

11「お気軽検索」の利用対象者について

学内・学外は、在学生に限られているのか？どこまで開かれているのか。

飯野：基本的に「お気軽検索」は学外も含め、どこからでも、だれでも利用可能。
ただし DB を使える範囲が、学内と学外では異なる⇒学生などはログインしてから利用

12「お気軽検索」の段階的な指導・タイミングが必要ではないか

学術論文の入り口としてはお気軽検索がふさわしい。その先は担当教員にアプローチするとベター。段階的な指導・タイミングが必要ではないか？

飯野：段階的指導については、ポータルサイトで検索できることを意識づけ、その後に教員と連携をとった上で、使い方を伝授できればいいと思う

13 ラーニング・コモンズのプランニングの協働に向けた学生の選択について

ラーニング・コモンズに向けた協働の中で学生をどのように選んだのでしょうか。とてもよい成果につながっていると思い、専門的な能力もある学生をどのように選んだのか。

赤澤：「学習環境のデザイン」の授業には、ほかの学生もいたが、実際の空間デザインに繋がる案を出してきたのが、偶然彼らだった。
図書館側のやりたかったことと、うまく意見がかみ合ったから採用された。

14 コモンズ検討メンバー以外の図書館スタッフの関与・意識について

赤澤：反対する人はいなかった。当初は、詳しく伝わっていないメンバーはいた。
改修の場所を確保するため、目録カードを処分するのではないか、と心配する意見もあった。

15 建築の院生との図書館協働について

建築の院生が図書館での活動を通して、成果を残したことは、彼らの業績に繋がるのではないか。

赤澤：空間デザインの賞を受賞しており、そうした面はある。また、今年度の新規改修においても、彼らの後輩にもつながることができた。

16 公募についての検討

協働した結果、うまくいったことは、結果オーライだけれども、公募でよかったのでは？

赤澤：他の学生にも機会を均等に与えるべきか

とも思うが、当初より、プロジェクトとして館内でオーソライズされており、特に問題になっていない。

17 図書館に来ない（利用しない）学生・教員へのアンケート、ニーズ調査

レファレンスに来ない学生、ガイダンスを受けない教員への調査、アンケートは行っているのか？なぜ利用しないのか、ガイダンスを必要としない理由など

矢崎：やってない→来る学生をまず手当して、成果を上げる。そこから来ない学生に手を伸ばす

※ただし、1年生には全員参加の授業がある。カリキュラムで、全員来させるものを年2回程度入れている。そのため、最低でも来ないということができないカリキュラムになっている。

18 お気軽検索が初年次学生に普及している理由

お気軽検索が初年次学生に普及している理由は？

飯野：図書館のウェブサイト、図書館内の端末にアクセスしたときに目につくようになっている

19 初年次の学生に対する図書館利用者教育

大正大学でもSummonを導入しているが、初年次の学生はOPACの使い方も分からず、Googleと同じように検索して、わけのわからないものばかり出てしまっている。そして混乱してもう使いたくないといわれてしまうので、どうしたらよいか。

松戸：状況は同じだが、教育学部の学生の例を挙げると、初年次の入門ゼミでOPAC（館内のみ）と「お気軽検索」（DB含める）の違いを教える。海外でも人名での違いも比較している。

飯野：佛教大学では、基本的に25％くらいがディスカバリーサービスを使用。75％はOPAC。
混乱まではなく、ポータルの1つとして提示しているので、うまく乗り換えている

20 ラーニングコモンズの学内広報と利用を促す教員の関わりについて

オープン後の学内広報の内容と、利用をうながすための教員の関りについて教えて欲しい

赤澤：大学広報に取り上げられたこと、図書館のHPや広報誌に載せたこと、また、オープニング・セレモニーをした。
当り前の事しかしていないが、あとは口コミで広がった。
先生たちにも来てもらったりしているので、そこから口コミも広まっている。

山本先生の報告

【アメリカのラーニング・コモンズについて】

（前置き）図書館雑誌2月号→全米では電子書籍の購入費が紙より2倍多い。（同じような値段なら電子版を入れる）日本では、電子書籍の購入費は全体の1.4％

・アリゾナ大の事例…アリゾナ大学（全米50～80位、南部ではかなり古い大学）

＊わたしが見学したアメリカの大学図書館では、ラーニング・コモンズは、無理に場所を作ったものではなく、資料が電子化されていく中で、図書館スペースに余裕ができ、その空間を有効活用するため、学生の要求に応じて机といすを入れたことに始まる。

＊州立大学は、州の人なら誰でも入れる。図書館のPCもパスワードなしで利用可能。
学生は、学内はWi-Fiのため、ノートPCを持参して使用。

○日本の図書館の学修支援

・理念と実態…成果を超えて、カリキュラムの科目だけではなく、卒業した後も使えるようなスキルを身に着けていってほしい。という意味で、「学修」を使用。教育の向上を狙う。
狭間の中で図書館を巻き込む学習サービスの動き＝知恵と工夫＋競争
学生に賢くなってほしい＝いいところに就職して、大学の評価・品質向上を望む。

・学生（ユーザー）のニーズに合わせて行う。

・紙の本ではなく、デジタルネットワーク社会だから、公的なウェブサイトであっても、判断・評価ができるように、情報リテラシー教育・レファレンス強化が必要。⇒上手にコピペする方法を教える

・図書館の情報機器をどうするか…電子書籍、DB、情報機器を駆使する。

実態はひっ迫する財政⇒アリゾナ大でも、7000万ドルの削減。教員の給与に対するデモなど。

○アクティブ・ラーニング（1990年代にアメリカで生まれた言葉）
課題解決型学習
→一方的な講義を聞くだけでなく、能動的に授業に参加し、自己の問題設定につなげるように教師も疑問を持たせる授業を行う必要がある。
情報収集を行う。※探索方法も含めて考慮する（ex; スマホで検索してしまうなど）
→このとき探索の仕方を学び、これを図書館が支える。ネットには真偽の不確かな怪しい情報があるため、情報リテラシー教育が必要になってくる。
教員による一方的な講義形式の講義とは異なる、学修者の効果的な学修
→教員の「学生を育てたい」という意志。学生についてきてもらいたいからこそのアクティブ・ラーニング
図書館の自館所蔵の文献情報、紙とデジタルの媒体に加えて、業者DB、無償DBを使うことも教える
※自分も使えるようにし、さらに学生が使えるよう準備することも大切
○学習支援
アクティブ・ラーニング→グループワークは議題によって、どの形でするといいか考えながら行うこと
・情報収集…思考が大切
➡学問への、本質的な満足感はどうか、という問題につながる
○学生と教員の関わりを伝える
講義形式の方が、一定の情報を迅速に伝えることができる。総量として、情報量の多さはこちらの方が多い。
本日はグループワークで、成果を得られたが、大量の情報を処理しながらのグループワークはできない。
・対話→合意→多数決→協調性⇒たくさんの人が好きなことをすれば分解する
同じような研究テーマで集まって話す⇒応用特許的なモノの考え方をするときは、グループがベター
一人でじっくり本を読む⇒変革の発想は、沈思黙考も必要
↓
“だけ”にとらわれない、バランスが大切。⇒これをどうやらせるか。
時代の流れは、アクティブ・ラーニングに流れている。それも確かに大切だが、流されて他の学修法を変えるのではなく、大学図書館でもバランスを考えることが重要。
（記録：石橋知子・松戸宏予）

九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館の学習支援
～教職協働新たな取り組みに向けて

九州女子大学・九州女子短期大学　附属図書館　業務課　副主幹　　矢崎　美香

本学図書館においての学習支援は情報リテラシー教育を主として展開してきている。特にここ数年（平成 23（2011）年度～）様々な取り組みを行い、授業内容を工夫している。

本分科会においてその取り組み経緯及び方法について報告する。

本学では 2011 年以前から情報リテラシー教育は実施していた。しかし、学習支援のための情報リテラシー教育というより、図書館の利用方法を教える内容であり、目的を明確にした体系的な実施ではなかった。

その授業内容の見直しを行い、平成 23（2011）年度から現在のステップアップする形式の内容と教員の意向（連携）を取り入れた授業を展開している。平成 24（2012）年度、文部科学省の「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」に採択され図書館内の視聴覚室を多目的学習室に改修するなどの環境整備を行った。図書館内の施設設備が整うと図書館におけるサービスのあり方も必然と形を変える事となった。その報告については、平成 25（2013）年度日本図書館協会第 99 回全国大会で発表した資料をご一読頂きたい。

図書館の施設設備の環境が整った翌年、私が平成 25 年度科学研究費助成事業（奨励研究）の採択を受け「学習スキルの向上に資するポートフォリオ型レファレンス記録の構築と効果」の研究を行った。研究内容は、図書館のレファレンス・カウンターでのレファレンス記録用紙（1 問 1 答）を継続的質問記録用紙として用い、レファレンス・カルテ（学生個別記録用紙）と名付け導入した。この記録用紙を用いることで、学生のニーズや躓き等、今まで把握しづらい学生の学習傾向を知ることができた。その情報の共有は、教員との連携を図るきっかけとなった。

情報リテラシー教育を始めた平成 23（2011）年は、依頼件数も少なく、レファレンス・カウンターも利用案内、所在質問のみで終わっていた。しかし、取り組みを行うことにより、徐々に情報リテラシー教育の依頼件数が増え、今年度は例年にない件数を実施した。依頼件数が増えた主な理由は、1 回で終わっていた内容を、複数回にわたる継続的な内容に移行したためである。また、短大専攻科の依頼により、授業外ではあるが前期・後期 15 回の修了研究講座を図書館企画で実施したことにもよる。

さらに教員との連携については、人間生活学科の依頼で図書館で行う情報リテラシー教育の 5 回分の授業内容を教員と共に組み立て、シラバスに反映させることができた。この連携は、図書館の取り組みとして大きな成果であり、今後の取り組みにおいて重視するところである。その連携のきっかけも、レファレンス・カルテの記録が大きく関わり、今まで見えなかった学生の躓きやニーズを教員が把握することができたからである。

このような経緯を経て今年度本学図書館において、学生の学習支援を教員と連携・協働で行うことを目的として取り組んできた。学生に対しての学習支援効果はわずかではあるが、「なんとなく学生の学習姿勢に変化がある」と教員から聞くことができた。今後効果を継続するために学科、学部等の組織と図書館の連携・協働体制をより強固にし、学生の学習支援に取り組みたい。

第20回FDフォーラム

【第13分科会】
大学図書館からの学習支援の工夫
～連携を視座に～

九州女子大学・九州女子短期大学 附属図書館の学習支援

～教職協働新たな取り組みに向けて

平成27年3月1日（日）　実践報告1

九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館　業務課　副主幹　矢崎美香（yazaki@kwuc.ac.jp）

1．はじめに

❑ 利用者（学生）2014年5月現在

九州女子大学　家政学部　約５２０人
（人間生活学科・栄養学科）
人間科学部　約８５０人
（人間発達学科［人間発達学専攻・人間基礎学専攻］）

九州女子短期大学　約３７０人

❑ 図書館職員

４人（館長含む）
パート2名（1日を2名で勤務）
夜間対応職員1名＋学生アルバイト2名

2

1．はじめに

① 学習支援の取り組み開始（2011年～）
② 平成24年度文部科学省「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」採択
③ 平成25年度科学研究費助成事業（奨励研究）採択
④ 平成25年度第99回全国図書館大会福岡大会第2分科会にて事例発表

3

1．はじめに

① 学習支援の取り組み開始（2011年～）

- 現状分析
- 学部構成
- カリキュラム
- 研究分野
- 学生の利用動向

情報リテラシー教育の展開

↓

広報

認知

4

1．はじめに

② 平成24年度文部科学省の「私立大学等教育研究活性化設備整備事業」に採択

学習、学習支援環境整備

多目的学習室　ブラウジングコーナー

レファレンス・カウンター

5

1．はじめに

③ 平成25年度科学研究費助成事業（奨励研究）

図書館サービスの中に課題や疑問が山積

- 定着しない学習傾向
- 学習支援（サービス）のあり方
- 学生のニーズ

- 他大学図書館の学習支援のあり方

6

1．はじめに

④　平成25年度第99回全国図書館大会福岡大会第2分科会にて事例発表

- 取り組みをまとめる
- まとめることによる取り組みの振り返り

新たな取組みの課題がみえる

7

2．新たな取り組みに向けて

■　現状分析

①　学生の利用動向
②　学生の学習傾向
③　学生のニーズ
④　教員のニーズ

8

2．新たな取り組みに向けて

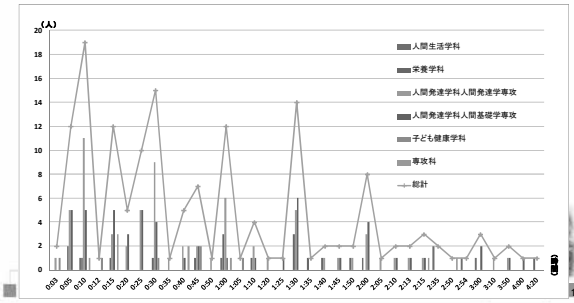
①　学生の利用動向　【図書館利用目的】

			九州女子大学				九州女子短期大学	
学科			人間生活学科	栄養学科	人間発達学科 人間発達学専攻	人間発達学科 人間基礎学専攻	子ども健康学科	専攻科
利用目的	資料利用	一般図書閲覧	5	12	51	44	3	8
		文庫・新書図書閲覧	0	1	13	11	0	0
		雑誌閲覧	1	1	6	7	1	0
		紀要論文集閲覧	0	0	1	2	0	2
		禁帯出図書閲覧	1	0	2	4	0	1
		書庫内図書閲覧	1	0	3	3	0	1
		パックナンバー閲覧	0	0	1	1	0	1
		視聴覚閲覧	0	0	0	0	0	0
		資料貸出	2	6	19	19	2	2
		資料返却	2	0	6	8	0	2
		雑誌閲覧	0	1	1	4	1	2
	パソコン（インターネット）利用	所蔵（OPAC）検索	1	1	10	10	0	4
		データベース利用	0	1	6	11	0	0
		論文検索	0	0	6	13	0	2
	施設利用	閲覧室	1	1	16	22	0	3
		ブラウジングコーナー（1F）	1	2	4	4	2	0
		小会議室（3F）	0	0	2	6	0	0
		多目的学習室（3F）	0	0	6	1	0	0
		学習室（4F）	0	2	5	3	1	0
	レファレンスカウンター利用	質問	2	3	3	2	0	4
		相談	3	0	1	1	0	4

9

2．新たな取り組みに向けて

①　学生の利用動向　【図書館滞在時間】



10

2．新たな取り組みに向けて

①　学生の利用動向

【図書館利用時の学習目的】

		九州女子大学				九州女子短期大学	
学科		人間生活学科	栄養学科	人間発達学科 人間発達学専攻	人間発達学科 人間基礎学専攻	子ども健康学科	専攻科
学習目的	予習復習	1	4	13	13	1	1
	レポート・論文作成	4	7	42	41	0	7
	調査・研究	5	3	14	14	1	9
	期末試験勉強	1	6	4	5	0	0
	資格受験勉強	1	1	11	13	1	0
	その他	2	2	13	11	2	1

11

2．新たな取り組みに向けて

②　学生の学習傾向

- ➢　来館しない
- ➢　文字（図書・雑誌等）を読まない
- ➢　人に頼る
- ➢　学習への興味が気薄

12

第13分科会

2. 新たな取り組みに向けて

③ 学生のニーズ

◆ レファレンス件数の内訳

➢ レファレンス総件数の約半数が所在調査または利用指導

➢ 事項調査は総件数の約１０～２０％

九州地区大学図書館協議会，九州地区私立短期大学協議会，他地区の大学図書館116館中，88館の回答より（平成25年11月30日現在）

大学図書館問題研究会 福岡支部 例会（別府例会）2014.2.15（発表資料）より

13

2. 新たな取り組みに向けて

③ 学生のニーズ

情報リテラシー教育を受講した学生のスキル定着に着眼

一斉講義（授業）の後に学生個人のスキルに合わせたフォローが必要

レファレンス・カウンターでのサービスのあり方

14

2. 新たな取り組みに向けて

③ 学生のニーズ

学生の学習の躓きを聞き出し、支援する事ができる
学生のニーズを聞くことにより、教員と共に解決する
教員のニーズを聞き出し、図書館の学習環境を整える

レファレンス・カウンターでのレファレンスインタビューは、学習支援に一番近いサービス

15

2. 新たな取り組みに向けて

④ 教員のニーズ

➢ カリキュラム(講義・授業)外の支援

➢ 協働・連携により学習スキルの向上

➢ 学生のニーズを引き出す伝達者

16

3. 新たな取り組み

学習支援とは？

学生が学ぶことの愉しさを実感すること

・統計に関する数字をあげることも必要だが、サービスの質をあげることが重要

・情報リテラシーだけでは学習支援にはならない

学生の学習意欲向上

17

3. 新たな取り組み

❑ 在学中に活用できる学習スキルの習得

❑ 学習のための情報スキルは必要不可欠
❑ 社会に出るためのスキル習得

❑ 卒業後に活用できる学習スキルの習得

❑ 卒業後の情報スキルは必要不可欠
❑ 卒業後の情報ツールが無いなかでの学習

18

3. 新たな取り組み

図書館の役割

- 自発的学習習慣
- 課題探求能力向上
- 課題解決能力向上
- 学習スキル習得

19

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

② レファレンス・サービス

取り組みを連動したサービス

教員との連携・協働の学習支援

20

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

■ 情報リテラシー教育の再考

- 学生の知的探究心を刺激
- 学修意欲の向上を目指す

情報リテラシー教育のメニューの追加

受講型 → 参加型

21

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

■ 情報リテラシー教育の再考

❑フォローアップ

- 再度のメニューの見直し
- メニューの積み上げ
- ステップアップする内容

22

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

■ 情報リテラシー教育の再考

❑教員との連携

- 課題や研究を行う学生に則した内容
- 学生にとっては密接な内容
- 授業の積み上げ

23

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

❑教員との連携

- 数回にわたる継続的な内容に移行
- 成果物作成授業との連携
- スキル形成を試みた授業

24

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

❑教員との連携

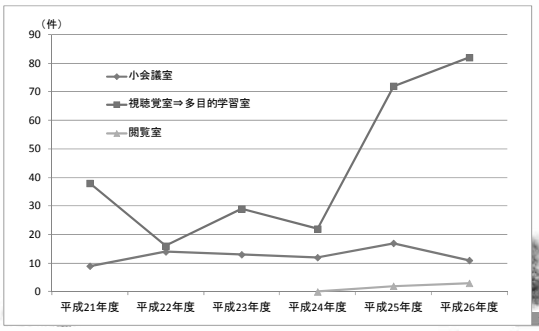
★ 評価をするのは教員 ★

- ➢ 学生の課題やレポート等に成績をつける
- ➢ 情報リテラシー教育実施前後の成績の差を評価

25

3. 新たな取り組み

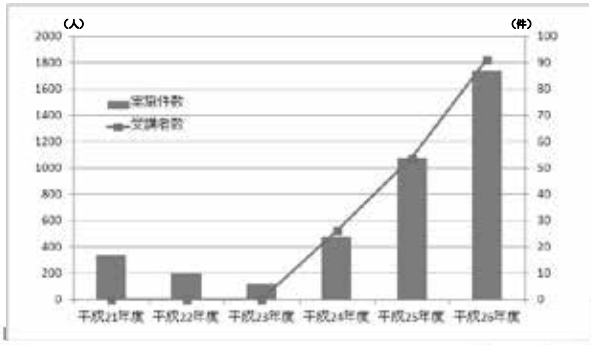
① 情報リテラシー教育 【館内施設利用状況】



26

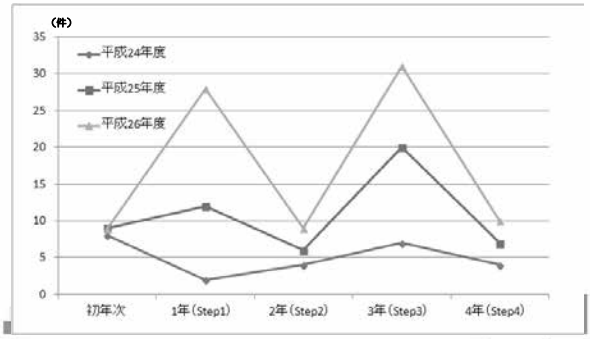
3. 新たな取り組み

【情報リテラシー教育申込件数及び受講者数】



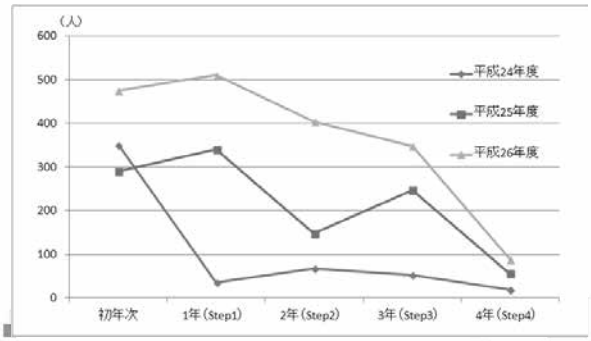
3. 新たな取り組み

【情報リテラシー教育Step 別申込件数】



3. 新たな取り組み

【情報リテラシー教育Step 別受講者数】



3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

◆成果物作成授業との連携

・実習に向けた成果物作成

成果物を作成する際の
スキル習得の評価を
教員・学生が行う

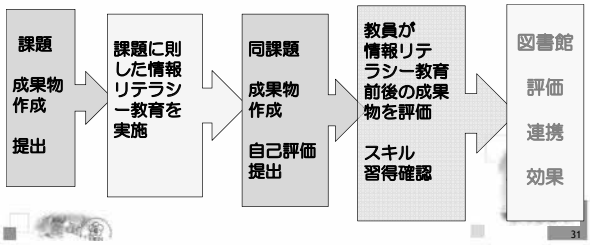
30

第13分科会

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

◆成果物作成授業との連携



31

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

◆成果物作成授業との連携

学科3年Aクラス(44名)			5点満点中			35点中		
学籍番号	氏名	フリガナ	1評価教員	2評価教員	UP	1自己採点	2自己採点	UP
			2	3		20	25	5
			2	3	1	20	26	6
			3	4	1	27	30	3
			2	3	1	20	27	7
			2	4	2	25	28	3
			2	4	2	20	25	5
			2	3	1	24	34	10
			3	3	0	25	30	5
			3	3	0	14	25	11
			3	3	0	25	33	8
			4	4	0	18	26	8
			2	2	0	22	29	7
	平均		1.9	4.0	2.1	22.2	28.0	6.2

32

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

◆スキル形成を試みた授業

■ 論文作成に伴うスキル習得

- ➢ 卒業（修了）論文を作成するための情報リテラシー教育を前期（15回）後期(15回)を実施
- ➢ 依頼は短大部長から
- ➢ 実施に伴うシラバスを学部長の意向を組み作成

33

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

◆スキル形成を試みた授業

単位にはならない情報リテラシー教育授業(15回)ではあったが、学生の出席率は良好であった。

情報リテラシーの必要性を認識

■スキル習得披露のため発表会を開催

- 学生のスキル習得を教員が判断
- 学生の意欲向上を確認
- 継続的な学習傾向の定着

34

3. 新たな取り組み

① 情報リテラシー教育

◆スキル形成を試みた授業

■ 文章作成・発表に伴うスキル習得

- ➢ 学科のキャリアデザイン授業を活用
- ➢ 依頼は学科長から
- ➢ 実施に伴うシラバスを教員と共に考案

■成果発表をビブリオバトル

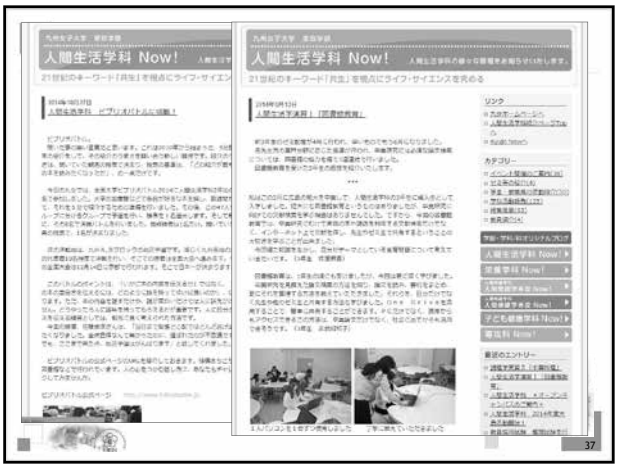
- 九州A・Bブロックにまで参戦

授業が愉しい

35

学科のブログに取り上げてもらいました

36



3. 新たな取り組み

② レファレンス・サービス

情報リテラシー教育が充実すると

学生質問の内容が変化 → 学生のスキルに合わせた対応 → レファレンス記録用紙（1問1答式）

↓

学生個別記録用紙

レファレンス・カルテ作成

39

3. 新たな取り組み

② レファレンス・サービス

◆レファレンス・カルテ導入

学生の躓きを支援

指導教員との連携による学習支援

学習意欲継続への支援

40

4. 取り組みの効果

学生が

♪ 学習する事の愉しさを感じること
♪ 自分の好きな事をみつけること
♪ 何が自分にできるかを知ること
♪ 学生自身が学習に向き合うことができること

意欲・向上

41

4.まとめ

❑大学の規模

- ❑学生の顔を覚えやすい
- ❑個々の学生に対しての対応が取りやすい
- ❑学生の学習傾向もつかみやすい
- ❑教員との距離も近い
- ❑学生の対応や進め方などの連携も図りやすい

デメリット ⇒ メリット

ポイント

継続的に取り組む事

42

4.まとめ

❑取り組み効果の持続

❑図書館職員のスキルアップ
❑新たな取り組み（仕掛け）

探究心をくすぐる企画

学習環境の維持

❑教員と連携協働の強化
❑教員→学科→学部の組織として取り組む

43

5.最後に

❑取り組みを行うには

・教員・職員共に目的が共通であること
・学生のニーズや動向等を察知

・学生は生涯学習の初心者

44

引用・参考文献（拙稿・発表資料）

（1）「九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館の学習支援　～新たな取り組みに向けて」私立大学図書館協会2014年度 西地区部会研究会　2014.9.13　（発表資料）
（2）「学習スキルの向上に資するポートフォリオ型レファレンス記録の構築と効果」『日本図書館情報学会春季研究集会発表論文集』2014．2014.5　p.11.
（3）「図書館情報リテラシー教育実施後の学習支援体制について　一質問紙調査に基づく考察」『図書館学』(104)，2014.3　p.19-30.
（4）「レファレンスと学習支援」『大学の図書館』33(3)，2014.3　p.33.
（5）「自発的学習効果を生む学習環境づくりとその仕組み～学生の課題探求能力育成のために」『平成25年度第99回全国図書館大会福岡大会記録』2014.3　p.57-59.
（6）「レファレンス・インタビューを もう一度!!　～レファレンス・カウンターでの学習支援を考える」大学図書館問題研究会 福岡支部 例会（別府例会）2014.2.15（発表資料）
（7）「自発的学習効果を生む学習環境づくりとその仕組み～学生の課題探求能力育成のために」『平成25年度第99回全国図書館大会福岡大会 第2分科会　大学・短大・高専図書館 2013.11.22（発表資料）
（8）「自発的学習効果を生む学習環境づくりとその仕組み～学生の課題探求能力育成のために」『平成25年度第99回全国図書館大会福岡大会要綱』　2013.11　p.31-32.

45

本日はご静聴有難うございました。

皆様の大学及び図書館における学習支援の参考となることを期待致します。

46

佛教大学図書館における学修支援
教員向け図書館ガイダンスの設定と実施に至るまで

佛教大学　附属図書館　専門員　　飯野　勝則

佛教大学図書館における学修支援
教員向け図書館ガイダンスの設定と実施に至るまで

佛教大学図書館専門員　飯野勝則
於第20回FDフォーラム
2015年3月1日

佛教大学図書館

はじめに

2　佛教大学図書館

佛教大学のあらまし

- 1912年開学
- 浄土宗による設立
- 京都市および南丹市にキャンパス
- 仏教学部をはじめ、保健医療技術学部など7学部体制
- 通学課程学生数：　約7000人
- 通信課程学生数：　約14000人

佛教大学図書館

佛教大学図書館のあらまし

紫野図書館

二条図書室（外観）

年間開館日数：　319日
年間利用者数：　31万人

4　佛教大学図書館

佛教大学図書館における学術情報

紙（冊子）のコンテンツ

- 所蔵冊数：約99万冊

電子コンテンツ

- 電子ジャーナルタイトル数：（英）約3万5000タイトル、（日）約1000タイトル
- 購読契約のあるデータベース／電子ジャーナルサイト：約40種
- 利用可能な電子ブック：約36万冊（うち35万冊強は国会図書館デジタルコレクション）

5　佛教大学図書館

学術情報の多様化と学修支援

6　佛教大学図書館

第13分科会

学術情報の多様化と「図書館の課題」

紙	電子
図書	電子ジャーナル
雑誌	電子ブック
文書	データベース
地図	デジタルアーカイブ
	リポジトリ

- 利用者の「目に触れない」学術情報は存在していないに等しい
- 多種多様な学術情報を「目に触れる」形で、教員、学生といった図書館利用者が利活用できる学習支援環境の構築

初期における「図書館の課題」解決の試み

①システム面では

- 「図書館ポータルサイト」の構築
- 検索エンジンとしての串刺し式横断検索の提供

②人的サービス面では

- 学生向け図書館ガイダンスの提供

※当初は同時並行的にそれぞれの担当で「手探り」で実施

横断検索

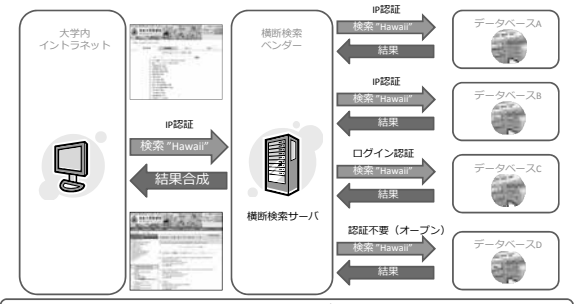
Multi Search / 360 Search

※2007年5月～2009年3月

※ 2009年4月～2011年3月

・キーワードを各データベースに投げて、その返答結果をひとつの画面上で統合して表示するシステム
・増え続けるデータベース（とくに英語）を利用者に効率的に使わせたいという必要性から生まれた

横断検索の仕組み



"Hawaii"を検索すると、"Hawaii"というキーワードを複数のデータベースに投げ、検索させ、帰ってきた結果を一つの画面で表示

初期フィードバック

①システム面では

- 横断検索の仕組み上、検索能力に課題があり、図書館が期待するような学修支援環境を構築することができなかった

②人的サービス面では

- 参加者が少ない場合が多く、広報効果に疑問符
- ガイダンス担当者と「図書館ポータルサイト」の設計者が異なるため、サイトコンセプトなどが十分参加者に伝わらない場合があった

※さまざまな要因からシステム面の課題解決を優先して手掛けることに

初期フィードバックを受けて

「システム面における改良」を手始めに

ウェブスケールディスカバリの導入

2007年5月

横断検索の導入

2011年4月

「 DUKKYO UNIVERSITY LIBRARY お気軽検索 」の導入

2011年3月

横断検索の廃止

- 2011年4月より、ウェブスケールディスカバリ「Summon」の正式運用を日本で最初に開始し、横断検索における問題点の解決を図る
- 「お気軽検索」というブランディングで、佛教大学の利用者（とくに初学者）への浸透を図る

ウェブスケールディスカバリとは？

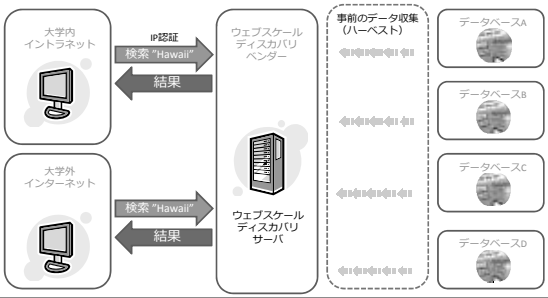
概要（あらまし）

- 図書館OPACなど自館のコンテンツから、商用のデータベースに至るまでを統合的に検索するシステム
- 洗練されたユーザインターフェース（画面）により、ブラウジングなどで新たなつながりなどの「発見」を導くことに重きを置く

特徴

- クラウドサービスとしての提供
- 図書館や各種の商用データベース等から収集されたメタデータを統合した、ウェブスケールな検索用の「セントラルインデックス」を所有
- 電子リソースに対し、定期的に自動でデータ更新（ハーベスト）を行うための仕組みを持ち、利用者に最新の検索データを提供
- 単一の検索窓で検索を行えるほか、検索結果全てを「関連度」順に表示

ウェブスケールディスカバリの仕組み

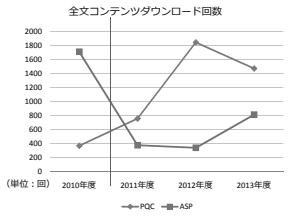


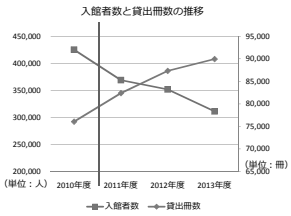
"Hawaii"を検索すると、"Hawaii"というキーワードをあらかじめ収集したデータを用いて作成した「セントラルインデックス」に対し検索を行い、その結果を表示する

「お気軽検索」のあらまし

- 電子で「全文」が公開されているコンテンツについては、検索結果から全文コンテンツにシームレスにアクセスすることが可能
- 検索可能（本学として利用可能）なレコード件数は、1億件以上

「お気軽検索」導入後の利用者動向





- 「お気軽検索」の検索回数は年々増加
- 書庫内学術雑誌の（出納）利用増加
- 「お気軽検索」で検索対象となったデータベースの利用回数がおおむね増加
- 入館者減少にも関わらず図書の貸出は増加

利用者動向から見る「お気軽検索」の評価

「直接的発見」の充実

- 目的とする資料を自ら効率的に「発見」することが可能となっている

「間接的発見」の発生

- 目的とする資料を含む、自らに有用と考えられるデータベースを資料の「発見」を経て、「発見」することが可能となっている
- 洗練されたインターフェースを通じて、検索結果をブラウジングすることで新たなアイデアを「発見」することが可能となり、検索の幅が広がっている（セレンディピティ）

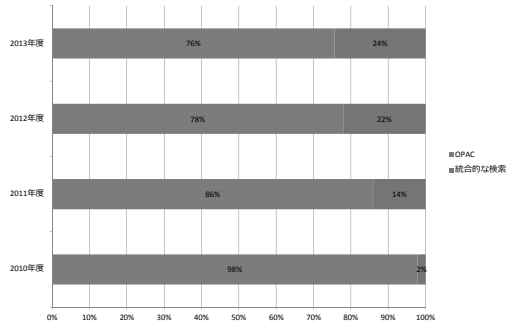
- サービス面からの十分な学修支援が行われていない状況下でも、利用者が自ら「発見」を積み重ねることで、一種のアクティブラーニング環境がもたらされている
- システム面からの初期フィードバックの反映としては合格点

第2次フィードバック

さらなる学修支援を行うために～懸念の払拭を目指して

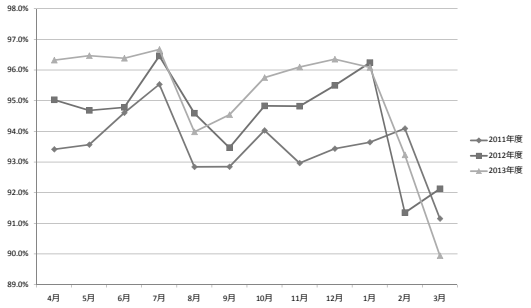
19 佛教大学図書館

①OPACと「統合的検索」の割合



20 佛教大学図書館

②日本語系キーワードの占める割合



21 佛教大学図書館

統計が物語るもの

①OPACと「統合的検索」の割合

- 「お気軽検索」は年々存在感を高めるものの、レコード件数の圧倒的な差（OPAC：お気軽＝99万：1億）を考えると、まだまだ検索割合を高めることができるのでは？
- 「お気軽検索」の機能や利用方法が利用者の間で十分に理解されているか疑問

②日本語系キーワードの占める割合

- 当初の狙い通り「お気軽検索」は、日本語コンテンツを主に利用する初学者（学部学生）にかなり浸透するも、英語文献を利用するような教員や大学院生にとっての認知度が低い可能性（利用はされているが活発でない傾向）
- 「お気軽検索」に関する図書館と教員の認識との間に、ギャップがある？

「いいサービスだと思うけど、もっと教員に理解してもらって、より学生の身の丈にあったサービスを目指す必要がある」

22 佛教大学図書館

主催研修会をきっかけとして

- 2013年11月、佛教大学図書館において、「2013 年度 私立大学図書館協会西地区部会京都地区協議会第2回研究会」を主催
- 利用者視点の報告として、大学院生に「お気軽検索」の利用例に関して、ショートプレゼンテーションを依頼

「今まで使い込んだことはなかったが、本格的に使ってみると、かなり便利」

23 佛教大学図書館

第2次フィードバック

初期フィードバックからの引き継ぎ

- 手がつけられていない人的サービス面からのアプローチが必要
- 学生が「お気軽検索」の機能や利用方法を知る機会を新しい発想で設ける必要がある

教員向けという視点

- 「お気軽検索」というコンセプトは、確かに初学者向けだが、大学院生のコメントにあるように、「使い込む」と研究者（教員）でも有用である可能性がある
- 「お気軽検索」の使い方を教員に「深く」理解してもらうことで、間接的により「深い」使い方を学生に周知してもらえる可能性がある
- 図書館として教員に伝えたいこと、教員から図書館に伝えたいことを相互に把握する機会がほしい

24 佛教大学図書館

二つのフィードバックを受けて

人的サービス面における改良

図書館ガイダンスの見直し

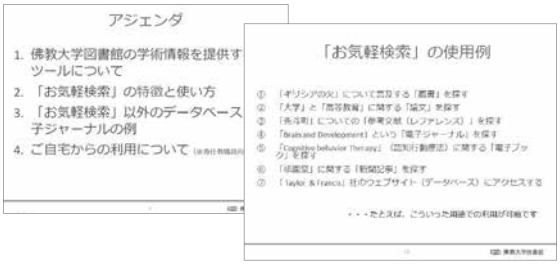
- 2014年度より、図書館ガイダンスの担当者をサービス担当者から、図書館ポータルサイトの設計者へと変更し、サイトコンセプトを直接利用者に伝えられる体制へと変更
- 通学課程の学生向けのガイダンスの内容をボーンデジタル世代に即した演習を多く含んだものに変更
- 通信教育課程の学生向けのガイダンスをリモートアクセスを前提としたものに変更
- 学生向けのガイダンスに加え、教員向けのガイダンスを新たに設定

教員向けガイダンス

テーマ	• 「図書館ポータルサイト」とデータベース・電子ジャーナルの使い方
実施日時	• 2014年4月9日（水）、5月28日（水）、6月25日（水）（※同内容で3回実施）
所要時間	• 1時間
主な対象者	• 新任の専任教員 • すでに在職している教員
告知方法	• 個人への直接メール（新任の専任教員） • 教員用メーリングリストの利用

※　ガイダンス1回目は9名、2回目は7名、3回目は3名の参加（複数回参加2名）

ガイダンスの構成



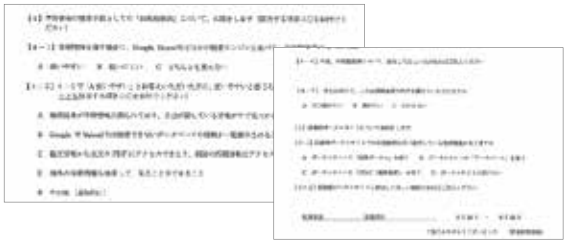
- 主に「お気軽検索」について、具体例を示しながら実習形式で説明
- ガイダンス後、教員の「お気軽検索」に対する印象やフィードバックの収集を目的として、アンケートを実施

ガイダンスで語ったこと

- 充実したキーワードでの蔵書検索
- リンクリゾルバを活用しての電子ジャーナルや書庫内学術雑誌を探すコツ
- 学内と学外で異なるレファレンス資料の検索結果
- 電子ジャーナルや電子ブックの効率的な検索方法
- 佛教大学図書館オリジナルの新聞データベースとの連携
- データベースサイトへのアクセス方法

※「知っていそうで知らない」可能性が高い「お気軽検索」のTIPSを中心にした内容

アンケート



- 全12問
- 選択式と自由記述項目により、「お気軽検索」に関する要望や感想などを収集

教員による主な評価と感想

ガイダンスに関する評価

- 「図書館ポータルサイト」及び「お気軽検索」の機能についての理解が深まったという点で評価が高かった
- 全参加教員から、「お気軽検索」を学生に「薦めたい」or「ぜひ薦めたい」という評価が得られた

感想

- 今まで論文を探すのに無駄な時間を費やしていたことを知った
- 大学院生を集めるのでガイダンスをしてほしい
- 実施する曜日を複数用意してほしかった
- 1時間では内容が厚く短い

31 佛教大学図書館

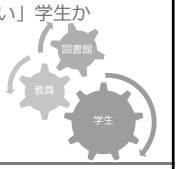
教員向けガイダンスを実施した結果

- 人的サービスに関する初期フィードバックを生かした学修支援の効果が実感できるようになった
- 図書館にとって適切な、さらなる情報のフィードバックが、教員からもたらされるようになった
- 利用者が「お気軽検索」をより「深く」使えるための指導が、教員により行われるようになった（図書館に複数教員から実施の報告あり）
- 図書館の授業への参加協力が要請されるような下地ができた

32 佛教大学図書館

図書館の授業への参加協力（参考）

- 後期の「図書館情報技術論」の授業2コマに参加協力
- 図書館や図書館員として就職することについて現場の視点から講演
- 率直に今後必要とされるスキルなどの話を行う
- アンケートを見る限り、「図書館員になりたい」学生からの反響も良好



33 佛教大学図書館

今後の展開

- 次年度においても、本年度と同様に教員向けガイダンスを実施する予定
- フィードバックを適切に生かし、システムと人的サービスの二つの側面で、より実際に即した学修支援ができることを目指したい

34 佛教大学図書館

ご清聴ありがとうございました

35 佛教大学図書館

京都大学附属図書館ラーニング・コモンズを巡る協働の経験から

京都大学　附属図書館　情報サービス課　課長補佐　　赤澤　久弥

大学図書館による学習支援のひとつの様態として、多くの大学でラーニング・コモンズの整備が進みつつある。京都大学附属図書館内に2014年4月にオープンしたラーニング・コモンズは、その企画・設計を図書館員のみで行うのではなく、教員、学生との協働により行ったことが特徴としてあげられる。今回の発表では、協働に至る経緯、協働の実際、協働における課題と今後の展望を述べることで、大学図書館におけるラーニング・コモンズを媒介にした連携のあり方を検討する材料を提示した。

まず、協働の前段階として、平成24年度中に、ラーニング・コモンズ設置をはじめとする館内ゾーニングの変更が計画され、附属図書館の複数部署に渡る職員及び研究開発室教員でワーキンググループにより、学内予算要求のための基本コンセプトを作成した。ついで、平成25年度に予算化がなされると、具体的なプランニングに教員や学生らの幅広い意見を取り込むこと、また、空間デザインのみならずそこでの「学び」をもデザインすることを目的として、京都大学学術情報メディアセンター「コンテンツ作成協同研究」の枠組みで検討を行うこととなった。さらに、「協同研究」メンバーである教員のつながりから、京都大学デザイン学大学院連携プログラムの授業である「FBL/PBL：学習環境のデザイン」と連携することとなり、図書館員、教員、学生からなるメンバーの協働が実現することになった。

協働においては、まず図書館側がラーニング・コモンズとして実現したい機能、実現したくない機能といった機能要件、そして「利用者間の創発を生み出す」、「図書館の資料・サービスへ接続する」といった空間の性格付けを提示した。その後、協働メンバーによる館内状況の調査や学生からのヒヤリングを行った。その上で、メンバー間でメールやミーティングによるコンセプトのすり合わせを行いながら、造作物設置を含む空間デザインや什器選定などにおいて、メンバー学生による提案の具体化を検討していった。その際、教員は学生のアイデアを実現するサポートを行い、図書館員は予算面や利用上の観点から評価をし、館内意思決定の段取りを行う役割を果たした。その中で、検討の過程から将来的な使われ方も含めて、「学びの実験場」であるという当館ラーニング・コモンズのコンセプトが創出された。

こうして完成したラーニング・コモンズは、約455㎡と決して大きなものではなく、他大学に比して開設時期も早くはないが、木製造作物「クスノキ」に象徴されるユニークな空間となっている。また、利用はグループによる討議などが主であり、かつ平日午後には平均50名以上の利用者が見られるなど、活発な学びの場として機能している。これをして協働の成果とするのは早計であるが、協働メンバーを核にしたさらなる館内改修計画の検討、図書館をフィールドとした「FBL/PBL」の継続など、発展的、継続的な展開がなされている。

さて、こうした異なる文化を背景とするメンバーの協働においては、実現したいことの相違から、意思決定のあり方やスピード感に至るまで、様々なコンフリクトが生じ得る。しかしながら、それは最終的に実現したい像を共有すること、そして、それぞれが持つコンテキストやリソースを提示することで解消できる。また、新しい機能空間を生み出すにあたっては、そうした協働の過程自体を意義あるものに転化し得ると考える。さらに、そのような過程を経て出来たラーニング・コモンズは、現在、図書館の発展的変化のコアとして機能しつつあると認識している。

参考文献：特集「LEARNING COMMONS OPEN!」. 京都大学図書館機構報静脩. 51(2):2014.7

京都大学附属図書館ラーニング・コモンズをめぐる協働の経験から

第20回FDフォーラム第13分科会

大学図書館からの学習支援の工夫：連携を視座に

京都大学附属図書館
赤澤 久弥
akazawa.hisaya.5s@kyoto-u.ac.jp

2015.3.1

■京都大学附属図書館 ラーニング・コモンズ

2

■ラーニング・コモンズの概要

- 2014年4月25日オープン(既存スペース改修)
- 設備
  - ✓ 附属図書館1階、455㎡、最大100人収容
  - ✓ 組替可能机、木製机(既存)、椅子(4種類)、共用デスクトップPC、プロジェクタ、移動式スクリーン、移動式ホワイトボード、壁面大型ホワイトボード、無線LAN、電源コンセント(床面各所)、壁面書架(＋ホワイトボード付き扉)、木製造作物「クスノキ」
- 図書館員、教員、学生の協働によるプランニングと運用
- 学習サポートデスクの設置による人的サポート

3

■ 改修前の状況

4

■ ラーニング・コモンズの風景

5

6

第13分科会

7

■検討のスタート：館内ワーキングの活動

- ゾーンニング検討ワーキンググループ（平成24年度）
  - ✓ 館内複数部署メンバー及び研究開発室教員で構成
  - ✓ 既存のスペース構成と機能の見直しを目的とする
  - ✓ 求められる機能や具体的な再配置計画を検討し館内合意を得る
- 予算要求へ
  - ✓ 閲覧空間の「アクティブ／中間／静寂」3エリアへの再構成による教育環境整備をコンセプトに立案
  - ✓ これを踏まえ、「アクティブ・ラーニング支援事業」として平成24年度中に学内予算の要求案を作成

8

■学内予算の要求

- 予算要求案のコンセプト
  - ✓ 背景として：本学中期目標(自学自習環境整備)、中教審答申(H24.3)、学生からの要望(会話可能スペース、静寂スペース)
  - ✓ さ　ら　に：他大学における環境整備の進行
  - ✓ これを機に：館内をゾーニングし、新しいエリアを作る

学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修や自学自習を促進するため、附属図書館に「アクティブ・ラーニング・エリア」および「サイレント・エリア」を整備する。具体的には、館内を利用目的別に下記3種のエリアに分け，機能の付加及び再配置を行う。
①アクティブ・ラーニング・エリア
②従来型の個人学習エリア
③サイレント・エリア

9

■協働による検討体制へ

- 予算化からの展開
  - ✓ 学生意見の取り込みを企図
  - ✓ 京都大学学術情報メディアセンター 平成25年度 コンテンツ作成協同研究 へ「大学図書館スペース協働デザインによる新たな"学び"への展開」として応募

本研究は、図書館内の空間デザインを学生・図書館員・教員・デザイナーが協働で行うことにより、新たな「学び」の形を支援する学修環境を創造し、京都大学の基本理念である「自学自習」をさらに促すと共に、これからの教育・学修形態を空間デザインから検討することを目的としている。

10

■協働の展開とプロジェクトの進行

- 授業との連携
  - ✓ 京都大学デザイン学大学院連携プログラム FBL/PBL「学習環境のデザイン」の課題に
  - ✓ FBL/PBL受講生による空間設計の提案の具体化へ
  - ✓ 司書課程受講生からのヒヤリングも
- プロジェクトの進行
  - ✓ 現地調査・ヒヤリング → 提案 → メンバー間でコンセプトを摺り合わせ → 図書館内でのオーソライズ → 施工・購入

11

■基本コンセプトからの発展

- 図書館側で基本コンセプトの設定
  - ✓ グループワーク、ディスカッション、プレゼン等を行なえる空間
  - ✓ 利用者間の交流や相互作用による学びを促す空間
  - ✓ 図書館の資料やサービスを活かした学びへ接続する空間
  - ✓ その他：エリア内機能区分、備える機器、運用ポリシー等
- 空間デザイン、什器選定等に対する提案の実現
  - ✓ 木製造作物「クスノキ」設置、壁面書架リノベーション、新規購入椅子の選定、既存机・椅子の活用
  - ✓ 検討過程からの「学びの実験場」という新たなコンセプトの創出

12

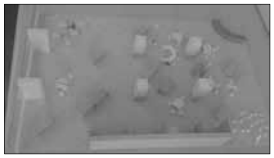
■ FBL/PBLのグループワーク

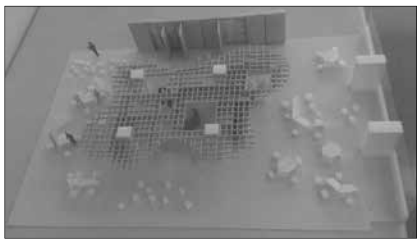
13

14

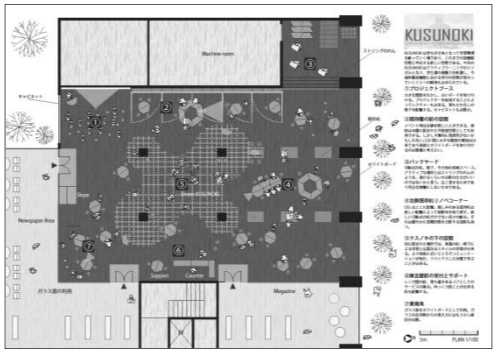
■ 空間設計の検討

15





16



17

■ 什器の選定

18

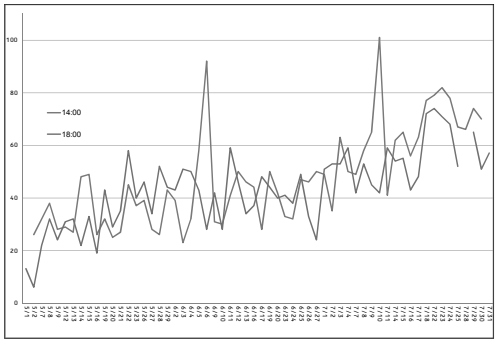
第13分科会

■オープン後の展開

- 活用プランの検討
  - ✓ 館内ゾーニングワーキング体制での検討
  - ✓ 学習サポートデスクスタッフによる取り組み
  - ✓ ラーニング・コモンズ空間の活用検討会（ユーザとのつながり）
- 利用・活用の定着
  - ✓ 学生による「アクティブ」な利用
  - ✓ イベントの実施（場の性格付け、認知度向上の観点での実施）
    若手研究者によるレクチャーシリーズ、
    学習サポートデスクスタッフによるレクチャーシリーズ、
    京都大学学術出版会との共催による読者会シリーズ 等

19

■ ラーニング・コモンズ在室者数



20

■多様な利用形態

21

■学習サポートデスク

22

■ ラーニング・コモンズ レクチャーシリーズ

23

■ ラーニング・コモンズ空間の活用検討会

24

第13分科会

■協働から成果を導く

- 学生のアイデア×図書館員の視点×教員の助言とサポート
- 適正規模のチームでの検討と組織としてのオーソライズ
- 所定の条件やメンバーの持つリソースの共有
- ゴールの確認と一定の柔軟性

25

■協働の経験から

- コンフリクト・マネジメント

コンフリクト（conflict）とは、「意見や利害の衝突、葛藤、対立」といった概念を意味する言葉。組織運営においてネガティブに評価されがちなこうした状況を、組織の活性化や成長の機会と捉え、積極的に受け入れて問題解決を図ろうとする考え方を「コンフリクト・マネジメント」と呼びます。コンフリクトを戦略的に活用することで、組織内のコミュニケーションや人間関係が強固になったり、異なる意見を集約する過程で新しいアイデアが生まれたりするなど、組織にとって多くのメリットが期待できます。

日本の人事部*(http://jinjibu.jp/keyword/detl/430/)* > 人事辞典

- 「図書館」の変化のコア
  - ✓デザインスクールFBL/PBLのフィールドとして採用
  - ✓URAとの連携：KURAデスク＆KURAワークショップのスタート
  - ✓さらなる改修の実現と学生・教員との協働の継続

26

■ 新たな改修計画における協働

27

ありがとうございました

第13分科会

大学図書館からの学習支援の工夫　～連携を視座に～

桃山学院大学　経営学部・経営学研究科　教授　　山本　順一

第13分科会
大学図書館からの学習支援の工夫
～連携を視座に～

ちょっとコメント

2015年3月1日　Sun. 10:00-15:30
於：同志社大学今出川キャンパス良心館
やまもと　じゅんいち

第20回　FDフォーラム　1

第13分科会

大学図書館からの学習支援の工夫
～連携を視座に～

今、大学図書館では、変革する大学にあって求められる大学図書館像として学習支援や教育活動への直接的な関与が必要となっている。では、大学図書館は学生にどのような学習支援を行っているのだろうか。当分科会では、ラーニング・コモンズ、学習スキルの手だての工夫の事例を、図書館職員・学生・教員との連携を軸に検討する。
ラーニング・コモンズでは、京都大学附属図書館が、図書館職員・学生・教員の協働を軸に、ラーニング・コモンズのコンセプトや設計を行った事例を紹介する。学習スキルの手だての工夫では、九州女子大学・九州女子短期大学附属図書館が、レファレンス事例記録や教員との連携を通して学習支援に繋げた事例を紹介する。また、佛教大学附属図書館が、お気軽検索の普及を図るうえで、学生のみならず教員に講習を開始した事例を紹介する。これらの報告を受けて、ミニシンポジウムでは連携を進めるうえでの課題と具体的手だてを検討する。

コーディネーター　松戸　宏予氏
佛教大学 教育学部 准教授
報告者　矢崎　美香氏
九州女子大学・九州女子短期大学 附属図書館 業務課 副主幹
飯野　勝則氏
佛教大学 附属図書館 専門員
赤澤　久弥 氏
京都大学 附属図書館 情報サービス課　課長補佐
コメンテーター　山本　順一氏
桃山学院大学経営学部・経営学研究科 教授

定員 45名
優先定員 25名

日本の大学図書館の学習支援
理念と実態

アメリカ等で実施

理念
- 製品=商品：学生の品質の向上　（教員との連携）
- 大学図書館として何ができるか　（学生の参加）
- 情報リテラシー教育・レファレンスの強化
- 館内外にラーニング・コモンズの設置

知恵と工夫，競争

実態
- 図書館資料・データベース・情報機器
- 逼迫する財政⇒コストカット⇒outsourcing

• Active Teaching: the teacher keeps speaking, writing, walking, shouting, sweating…
•Passive Learning: students sleep, play computer games or talk about the party last night.

https://mathsimulationtechnology.wordpress.com/2012/02/16/active-learning-passive-teaching/

---

http://www1.umn.edu/ohr/teachlearn/tutorials/active/what/

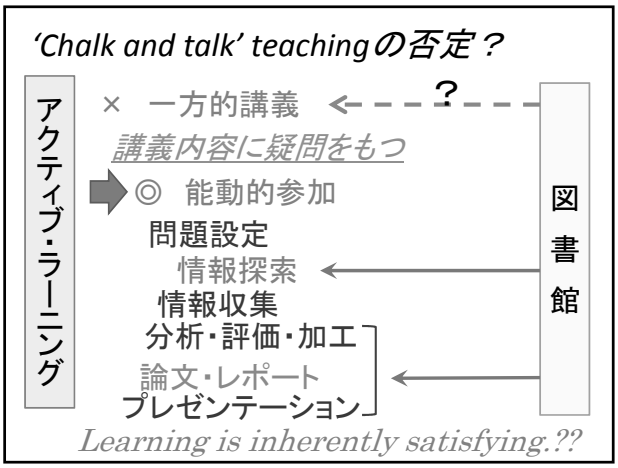
What Is Active Learning?

Defining "active learning" is a bit **problematic**. The term means different thing to different people, while for some the very concept is redundant since **it is impossible to learn anything passively**. Certainly this is true, but it doesn't get us very far toward understanding active learning and how it can be applied in college classrooms.

We might think of active learning as an approach to instruction in which students engage the material they study through reading, writing, talking, listening, and reflecting. Active learning stands in contrast to "standard" modes of instruction in which **teachers do most of the talking and students are passive**.

アクティブ・ラーニング？

- 課題解決型学習
- 教員による一方的な講義形式の講義とは異なり、学修者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称（文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」2012）



窓

大学図書館と電子書籍

荘司雅之

Thank you for not smoking.
University Libraries
Information Commons
2014/8/7

2014/8/7